

ラトビアの児童書事情

2011年12月
作成者 黒沢 歩

ダイナス、パサカス、ラチプレシス

ラトビア民族は自らを「歌う民」と発信し、20万超の膨大な民謡の宝庫を誇る。ラトビア民謡を総称するダイナス(Dainas)は民族の道德観と美意識の基盤をなし、その韻律、フォルム、メタファーは近現代のラトビア文学に継承されている。ダイナスを全6巻(1894-1915)に編纂したバロンス(Krišjānis Barons, 1835-1923)は「ダイナスの父」と呼ばれ、バロンスが民謡を分類した「ダイナスの棚」はユネスコ世界文化遺産に登録されている。

民話や物語をラトビア語でパサカス(Pasakas)という。ラトビアの典型的な民話は「むかしむかし、海(または山)の向こうのはるか遠くで…」にはじまり、竜を退治し、謎解きと善行を三度繰り返すことでハッピーエンドとなるものが多い。プシュカイティス(Ansis Lerhis-Puškaitis, 1859-1903)は、数千に及ぶ民話と昔話を『ラトビア民族の昔話と民話』(全7巻、1891-1903)に編纂して、パサカスのジャンルを確立した。

印欧語族バルト語派を形成するラトビア語は、13世紀以降、周辺諸国に支配されつづけたラトビア民族の口承によって維持されてきた。その文字化は、聖書の翻訳によってはじまった。ドイツ人宣教師の啓蒙主義者ステンデル(Gotthard Friedrich Stender, 1714-1796)によるラトビア語の「絵によるABC」(1787)には、キリスト教の教義が色濃い。やがて19世紀後半に民族意識が芽生えると、ラトビア語が他言語に劣らず深みを繊細に表現しうる言語であると認識され、冒頭に挙げた民謡民話が収集されるようになった。同じころに書かれたのがLāčplēsis(1888、Andrejs Pumpurs, 1841-1902)で、この作品は『勇士ラチプレシス』(ンプル原作、袋一平著、講談社、1953)として初めて邦訳されたラトビア文学である。ラチプレシスとは熊を引き裂く者を意味するが、熊に育てられた少年はやがて熊を引き裂くほどの力持ちになり、ラトビアの地を侵略しようとするドイツ人とその狡猾な手先との闘いに挑む。高潔を象徴する女性と勇気を象徴する魔女というふたりの女性が、ラチプレシスの人間としての成長に重要な役割を果たす。英雄伝でありながらハッピーエンドで終わらないところが、あたかも民族の苦難の歴史を暗示している。史実を題材に民俗の神々を登場させ、19世紀の民族の目覚めと国家独立の思想をみごとに重ねた叙情詩として、民族ロマン主義の代表作とされる。再版は17回を数え、後の文学や芸術の題材となり、ロック版オペラ化され、世界各国語に翻訳されている。ロシア語から重訳された邦訳は、解説を交えた読み物となっている。

近現代の作家たち

ラトビア文学において創作童話を確立したスカルベ(Kārlis Skalbe, 1879-1945)は、民話を題材としつつも悪を退治せず幸せな結末も迎えず、「幸せとはあると思ったときにはもう消えている、ほのかな香りにすぎない」透明な世界を築きあげ、「静けさの魔術師」とも「ラトビアのアンデルセン」とも称されている。ラトビア童話の代表作とされるスカルベの『猫の風車小屋』(1913)は、徹底した人道主義で貫かれている。この作品は再版されラトビアの教科書に掲載され、アニメ化もされた。(スカルベにも継承された)動物のみならず万物に人間の言葉を語らせ、人間と自然との密接な関係を描くラトビア民話の世界は、ラトビア児童文学のひとつの特徴を成している。

ラトビアの民族構成と言語環境は特異なものがある。総人口約220万人のうち民族的なラトビア人は6割のみで、4割はロシア語系住民が占める。ラトビアは1918年に共和国として誕生したが、ふたつの世界大戦では独ソの狭間で翻弄され、ソ連邦に併合された。この間にラトビア人の約8万人がシベリアに移住を強いられ、さらに多数の亡命者を出した。やがて、1989年にバルト三国の人々は手をつなぎ「人間の鎖」をむすんで独立の意思を表した。1991年の独立回復は、半世紀ぶりの念願であった。こうした背景から、公用語がラトビア語であっても、本屋や図書館の書架

はほぼ6対4の割合でラトビア語とロシア語に分類されている。

ソ連占領時代のラトビア文学界には、ノーベル文学賞候補であったベルシェヴィツァ(Vizma Belševica, 1931-2005)がいた。不満と抵抗に満ちた詩を書いたがゆえにソビエト政権による発禁処分は7年に及び、図書館からも作品が撤去されていたが、その間に「クマのプーさん」や「ドリトル先生」を翻訳したほか、子ども向け戯曲や童話を発表した。晩年の自伝的三部作『ビッレ』(1996,1997,1999)はスウェーデン語に翻訳され、トランストロム文学賞を受賞している。

2011年のボローニャ国際絵本原画展に参加したラトビアのブースでは、二人の作家が紹介された。ジエドアニス(Imants Ziedonis, 1933-)は、ソ連時代から一貫して民族的な愛と誇りを独創的に表現しつづけ、2011年のリンドグレン文学賞にラトビアから推薦されている。ラトビア文化賞が2006年に作成した「黄金のラトビア文学百選」に選ばれた『いろとりどりのお話』(Krāsainas pasakas, 1973)は再版を重ね、近年には舞台化もされ、色褪せない作品である。他方、ズヴィルグズディンシュ(Juris Zvirgzdiņš, 1941-)は、作家自身のポケットに住む熊のトビアスの冒険シリーズ等で、一躍人気を博している。文学界において、ラトビアの英知を象徴する二人といえよう。

賞と出版、流通

ラトビアの児童書及び原画を対象とする賞の、主なものを挙げる。

歴史的に古いバルトヴィルクス賞は、青少年文学委員会主催の「本を読む白い狼」プロジェクトの一環として、作者、絵本画家、翻訳者に与えられる。白い狼(Balts vilks)とは詩人バルトヴィルクス(Jānis Baltvilks, 1944- 2003)に由来し、その生誕日(7月24日)が例年の授与式である。近年ではバルト海沿岸諸国に対象が広げられ、リトアニアやエストニアの作品にも授与されるようになっている。

次に、子どもだけが審査員となるユニークな賞として、子ども審査員賞チョコレートブックがある。2001年から、例年3月開催のバルトブックフェア中に授与されている。2011年は国内外(ラトビア人移民組織のある欧米諸国)の図書館施設440において、6歳から16歳までの15,000人以上が候補作品を評価している。主催者の国立図書館児童文学センターによると、当初3年間は外国作品の翻訳が人気を博していたが、2004年を機にラトビア語のオリジナル作品が受賞する傾向が強まり、ラトビア児童書の読者の育成に貢献しているという。

金のリンゴの木賞は、専門的かつ芸術的な出版物に与えられる。これら多数の受賞を誇る児童書専門の出版社リエルス・ウン・マズス(Liels un mazs)は、ジャーナリスト出身の詩人ザンデレ(Inese Zandere, 1958-)が2004年に創立したものである。思考柔らかな創造の世界を軽快なリズムで綴るザンデレの詩集『内と外』(舞台化)は4版を重ね、「黄金のラトヴィア文学百選」に21世紀の児童書から唯一選ばれた。同じく『妹と兄』(2008年子ども審査員賞受賞に合わせてアニメ化)も国内多数の賞を獲得し、『ラトビアのけものたち』は複数の若手アーティストの共同制作による新しい絵本を切り開いた(2010年バルトヴィルクス賞アート部門受賞)。ザンデレは、ラトビア児童書界の刷新に一石を投じたといえる。

このほか、パスタリンシュ賞(作家ビルズニエクス・ウピーティスの作品にちなみ、ロヤ市にて児童書と絵本画家を対象に隔年授与)、ゼベリンシュ賞(クルディーガ市にて地元出身の画家の生誕125周年に、絵本画家と地元の作家を対象に5年に1度授与)、教科書と児童書界のシェアが大きい星ABC出版社(Zvaigzne ABC, 1993年創立)では、内容共に芸術性が高い児童書を対象に「星の本」コンクールを主催し、若手デビューの機会を提供している。

原画の分野では、繊細な画風が幻想的でさえあるパエグレ(Anita Paegle, 1956-)が挿絵をする絵本が、タリン・イラストレーション・トリエンナーレ賞、バルトヴィルクス賞、金のリンゴの木賞、ゼベリンシュ賞等高く評価され、2012年の国際アンデルセン賞にバルト三国から唯一ノミネートされている。

児童書に150円程度の簡易なものから美しい装丁の高価なものまでであるのは、詩集と絵本が贈答品の代表格であるためだろう。出版流通業界と文化団体は、消費税22%に対しラトビア語書籍及び教科書に関する減税措置12%を勝ち取っている。バルトヴィルクスが1958年に創刊した児童雑誌「小鳥」(Zilītes)と1991年創刊の幼児向け雑誌「ハリネズミ」(Ezis)は、いずれも月額購読料がほぼ150円と安価で、絵本作家自らが編集に携わっている。インターネット上では、童話の読み聞かせやアニメ化された童話の視聴を提供する「パサカスネット」が広く普及している。

(www.pasakas.net)

日本との関係については、邦訳された児童書は『勇士ラチプレシス』と『ひつじかいとウサギ、ラトビア民話』(1977)のみであるが、ラトビア語に訳されたものには日本昔話集(1994)、子ども向け俳句集(1995)、宮沢賢治童話集(1998)、村上春樹著『羊男のクリスマス』(2006)がある。

「真夜中に歌う馬」

本報告の作成にあたり、「真夜中に歌う馬ーラトビアにおける児童文学」(ラトビア文学センター作成、2011年改訂版)を参考にした。「真夜中に歌う馬」は、ヴァーツィエティス(Ojārs Vācietis, 1933-1983)の詩『Minipasaciņa』(ミニお話)に登場する。

泣いたって、笑ったってかまいません、真夜中に歌うぼくの馬のことを。

メロディーも歌詞もなく、そもそも歌もなければ馬もいないんです。

それでも、生きるにはそのほうがいいんです、真夜中に歌う馬がいるほうが。(筆者訳)

人が眠る真夜中に、馬が歌ったことなどだれにも証明できない。民族性が抑圧されていたソ連時代に書かれたこの詩は、たとえ周囲に理解されなくとも自分の夢を持つことを提唱し、ラトビア人としての誇りを保ち精神の自由を喚起している。英語文化の拡張を背景に少数民族の児童文学が生き残る道、グーグル世代に提供する本と図書館の形態、国の児童書支援のあり方が模索されているラトビアにおいて、児童文学関係者らが「真夜中に歌う馬」の精神を担っていることに注目したい。

2010年に出版されたラトビア原語の児童書は56作品を数え、ラトビア大学のスティカーネ教授が「予想以上に多くて驚き、新しい作家の登場によってラトビア児童文学はますます豊かになった」と述べている。近年は代表的な童話がCD化されて再版されるなど、ラトビアの児童書事情はしたたかに健全であるといえよう。

最後に、スティカーネ(Prof. Ilze Stikāne)教授、ラトビア文学センター、ラトビア国立図書館児童文学センター、ブシェヴィツァ(Līga Buševica)ラトビア文化省担当官諸氏の迅速適切なお協力に感謝したい。(黒沢歩、ラトビア語翻訳通訳)